



TITLE:

ローザ・ルクセンブルクのマルクス主義方法論 - 『社会改良か革命か』の1つの論点 -

AUTHOR(S):

竹本, 信弘

---

CITATION:

竹本, 信弘. ローザ・ルクセンブルクのマルクス主義方法論 - 『社会改良か革命か』の1つの論点 -. 経済論叢 1968, 102(4): 261-280

ISSUE DATE:

1968-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/133302>

RIGHT:

# 經濟論叢

第102卷 第4号

---

19世紀後半期のイギリス使用者団体……………前 川 嘉 一 1

ローザ・ルクセンブルクの

マルクス主義方法論……………竹 本 信 弘 17

体系的切羽と機械採炭……………阿 部 功 37

社会政策の発展理論……………石 田 傳 56

## 書 評

白 髭 武「広告とPRの研究」……………橋 本 勲 74

---

昭和43年10月

京 都 大 學 經 濟 學 會

# ローザ・ルクセンブルクのマルクス主義方法論

——『社会改良か革命か』の1つの論点——

竹 本 信 弘

## I 問題の提起

〈ドイツのローザ〉の思想と行動をめぐる問題性を明きらかにし、ローザ＝マルクス主義の全体像を復元するためには、まずもって、〈ドイツのローザ〉における革命思想の展開を、そのスターティング・ポイントにおいて、つまり世紀転換期（1898—1903年）の修正主義論争において、掴めることが必要であると思われる。そしてこの点を解き明かしてゆくうえで、なによりもまず素材として依拠しなければならないのは、修正主義論争の最大の理論的成果と目される『社会改良か革命か』（„Sozialreform oder Revolution?“, 1899）であるだろう。したがって、わたしのローザ研究の当面する課題は、この『社会改良か革命か』における理論的内実を批判的に開示することに尽きるのである。

彼女がこの労作のなかで問題にしたのは、第1に、——社会改良か革命か、という論争風の標題から窺われるように——社会主義運動の革命的展開はいかにして可能か、ということであった。彼女は、この理論課題を次のように解決したのである。すなわち、まず、プロレタリアートの独自の闘う政治世界を構想し、この世界の物質代謝である社会主義運動のあり方を矛盾的困難性において把え、更にこの世界と運動のなかに、ブルジョア政治世界の論理を定位し、最後に、こうしたことのすべてに関わる主体的過程を、生きた総体としての闘う階級主体の確立として考える、——というのが、彼女の論考の概要であった。わたしは、本稿とほぼ同時に執筆を進めた別稿のなかで<sup>1)</sup>、〈ポーランドのロ

1) 拙稿、ローザ・ルクセンブルクの社会主義運動論、「思想」第531号は、本稿と1つのものとして書いたものである。参照されたい。

ーザ〉から〈ドイツのローザ〉への転換と『社会改良か革命か』をとりまく運動レヴェルでの問題状況の解明という、いわば問題史的なアプローチを踏えて、より基本的には、社会主義運動論をめぐるこのような彼女の理論的営為を批判的に明きらかにしようとしたのである。

しかし、『社会改良か革命か』における彼女の論考は、けっしてこうした問題領域にのみ限られるものではない。すなわち、彼女はこの労作のなかで、同時に、——強いていうなら——ユートピアか科学か、というサブ・タイトルのもとに、社会主義〈理論〉はいかにして可能か、ということの問題にしていたのである。そして先に触れたところの、社会主義〈運動〉はいかにして可能か、の論考が、硬貨の表だとすれば、社会主義〈理論〉はいかにして可能か、というこの論考は、その裏面なのである。そして両者の問題領域は、並列する別個のものではなくて、このように表裏の関係にあるものとして、あるいは、裏が表を支えるという仕方、ひとつのものとして存在しているのである。

わたしは、本稿において、このような意味での、『社会改良か革命か』の裏面を、つまり、社会主義〈理論〉はいかにして可能か、というマルクス主義の方法論に関わる問題を、次の順序にしたがって検討したいと思う。——すなわち、まず第1に、この問いが当時のドイツ社会民主党SPDのなかで、どのように位置していたか、ということ、したがってローザの課題は何であったか、ということ、Ⅱ SPD理論界と革命の現実性 のなかで解明し、第2に、彼女はこの課題に応じてゆくうえで、どのように基軸的範疇を確定し、かつ、それにどのような構造的連関をもたせていたのか、ということ、Ⅲ 総体的範疇の優位、Ⅳ 歴史的必然性の構造 で論じ、最後に、Ⅴ ローザ＝マルクス主義方法論の問題性 では、以上の展開を踏えて、ローザ＝マルクス主義方法論の立体構造を総括するとともに、そのなかに、彼女の方法論の問題性を探り見たいと思うのである<sup>2)</sup>。

2) ローザ＝マルクス主義方法論に関わる本稿は、拙稿、ローザ・ルクセンブルグのポーランド革命論—若きローザの思想と行動 (2)、『経済論叢』第98巻第2号、のなかの(Ⅳ)方法意識の確立、に連続するものである。

## II SPD理論界と革命の現実性

社会主義〈理論〉はいかにして可能か、という問いは、当時のSPDのなかにどのように位置していたのであろうか。これが、本節で明らかにされなければならない。わたしは、マルクス主義〈理論〉のもつ特質を考えることから、この節の展開を始めたいと思う<sup>3)</sup>。

一般に、思想といい、理論というも、それが、思想であり、理論であるためには、現実には、現実の實踐と結合しなければならない。しかし、マルクス主義の場合、問題は、現存する存在領域の解釈ではなくて、その変革にある。だから、現実には、現実の實踐と結合するといっても、それと直接に結合するわけにはゆかない。経験的かつ自然成長的に既成態として存在している領域の枠内にとどまっているわけにはゆかないのである。そうではなくて、マルクス主義の理論は、この目に見える直接的な現実の枠とその枠内での實踐から、自分を外的なものとして分離し、これと対立し、これを質的に変革することなくしては、理論となることができないのである。したがって、こうである。マルクス主義〈理論〉が〈理論〉があるためには、現実の實踐と結合しなければならないのだが、それと同時に、とりわけ〈マルクス主義〉理論であるためには、理論は、現実の實踐に外的なものとして、それから分離し、それと対立し、その枠を超えていなければならない。結合のためには分離がなければならないのである。これは、明らかに、悪循環であり、困難性である。しかも、マルクス主義の理論に固有の必然的な悪循環であり、困難性なのだ。それは、したがって避けることができない。

そしてマルクス主義〈理論〉における、こうした矛盾的困難性のために、理論は、一方では、現実との〈結合〉を忘れて、現実の實踐とは無関係な、外的な理論として自分を〈教条化〉する危険を孕みつつ、同時に他方では、現実と

3) マルクス主義については、「今日におけるもっとも創造的なマルクス主義哲学者」藤本進治氏の理論的営為に多くを教えられ啓発されている。とりわけこの点では、同氏、『マルクス主義と現代』（1967年）、の中の第1部を参照されたい。

の〈分離〉を媒介とすることができず、自然成長的な現実の実践と直接に結合して、ブルジョア的な思想へと〈俗流化〉する危険を孕んでいるのである。〈教条化〉と〈俗流化〉とは、かくして、マルクス主義理論に本来的に内在している二重の危険性なのである。

前者は、いきなり現実から超越し、現実の現われを軽んじ、ゆたかに展開する現実を抽象的な本質へと単純に還元しようとする。マルクスが明らかにした資本主義階級社会の本質を直接に現実にあてはめることによって、彼らは、現実の現われや現実の行ないから、つまりこのゆたかなものの展開から、学ぶことを、みずから方法的に不可能にしている。かくて、彼らの方法上の帰結は、ひからびた教条による現実の切り捨てであり、またそのことの別の表現でしかないが、静観的な事後意識による実証的な解釈学の道なのである。これがすなわち、当時のSPDにおいて、カウツキーを中心にして現われていた理論傾向であった。

また後者は、現実の超越・切り捨てに直接反撥し、あるがままの現実こそ重要であることを主張し、みずから現実主義者をもって任ずる。彼らは、マルクスの認識は既にふるくなり、過去のものになった、という現実感覚から出発し、現実に現われているもの、現実に行なわれているもの、つまり与えられた現実の自然成長的な諸現象を、しかもそのひとつひとつの諸事実を、それ自体として、解き放とうとする。すなわち、彼らは、みずからの理論の決定権を、自然成長的な直接あるがままの現実に与え、その前に拝跪することによって、ブルジョアの俗流化の道へと傾斜してゆくのである。彼らは、自分が全面的に依拠しようとしている〈あるがままの現実〉とは、なによりもブルジョアジーの現実であって、そのままでは、プロレタリアートの現実ではないということ、そしてプロレタリアートの現実はあるものではなくて、作りだされるものだという、このことは思いもよらない。ブルジョアジーの現実の現われと行ないという疎外された形態をとって、プロレタリアートのどのような現実が現われ展開しているのか、ということ、これをわきまえることなくしては、プロ

レタリアートの現実はいかなるものでもない。プロレタリアートは、まさにこのような意味での〈現実〉の立場に立っているのであって、この点からすれば、ここでいう、あるがままの現実主義というのは、括弧付きの「現実主義」なのであった。そしてこのような「現実主義」の立場は、当時のSPDにおいては、ペルンシュタインと修正主義者たちの理論傾向だったのである<sup>4)</sup>。

だとすれば、当時のSPD理論世界は、きわめて危機的な状況にあったといわなければならない。そこでは、理論は、真の意味で現実と結合することができず、理論は理論として、現実はいかなるものとして、実践は実践として、それぞれ分断・固定されていたのである。理論と現実とが、あるいは理論と実践とが、真に結合されず、その分裂が固定されるとき、マルクス主義〈理論〉は、それ自体に内在する二重の危険性に、つまり〈教条化〉と〈俗流化〉という——一見正反対の——二重の危険性に、同時にさらされるのであり、これが、まさしく当時のSPD理論界の状況だったのである<sup>5)</sup>。そしてそれが危機であるのは、〈教条化〉傾向にしる〈俗流化〉傾向にしる、現実と実践の、したがって理論の、自然成長性をその本質的な特質としていたからであり、そしてこのことは、変革の理論であり実践であるマルクス主義を理論的かつ実践的に武装解除するものであったからである。

これが、ポーランドの青年革命家ローザ・ルクセンブルクを迎えたSPD理論界の問題状況であった。しかし、当時のSPDのなかの〈東方の革命家たち〉がそうであったように<sup>6)</sup>、ローザも、そうした次元を質的に超えた世界の人であった。ポーランドの革命闘争を闘ってきた彼女には、迫りくる〈革命の現実

4) 藤本進治、『革命の哲学』（1964年）、144頁、248-256頁、を参照されたい。

5) ローザ自身次のように述べている。「思惟に際して『確かにマルクス主義の基礎の上から』踏み外さないようにという痛々しい心配は、個々の場合、思想活動にとっては、他の極端——まさにマルクスの思惟方法を完全に脱却することによって、いかなる犠牲を払っても『自己の思惟の独立性』を立証しようとする痛ましい努力——の場合と同様に、不運なものであったであろう」（『マルクス主義における停滞と進歩』1903年）と。

6) 〈東方の革命家たち〉のなかでとくにバルブスの思想的意義については、山口氏の次の研究がある。参照されたい。山口和男、バルブスの世界資本主義論について、『甲南経済学論集』第8巻、第1、2号；P. Nettl, *Rosa Luxemburg*, Oxford U. P., 1966, p. 34で、彼はトロツキーの「ロシア的方法」に関連させて、論じている。またこれを書評した Z. Zemad, "Rosa Luxemburg", *Survey*, July 1966は、とくにこの点からローザを捉えようとしている。pp. 167-170。

性〉への歴史的洞察があったからである。「ローザ・ルクセンブルクはロシア領ポーランドの革命家として〈3月前期の状況〉のなかに立っていた。そしてすでに革命が現実の政治を規定していたし、定型からは解決できぬ諸問題を提起していた」<sup>7)</sup>。P・フリーリッヒのこの評価は、ローザ＝マルクス主義の特質を非常に的確に捉えている。というのも、彼女は、このように〈革命の現実性〉を深く洞察し、その流れの渦中に身を置き、それをみずからの現実として生きていたからこそ、マルクスの理論遺産をマルクスの方法で考察し、そのなかに革命の原理を認識することができたからである。だが、ローザが〈革命の現実性〉を認識していたことの意味は、それだけにとどまらない。それは、より原理的には、すでに触れてきたマルクス主義〈理論〉の特質に深く関わっている<sup>8)</sup>。すなわち、マルクス主義にあっては、既成的なブルジョア社会の自然成長的な〈あるがままの現実性〉の底に、プロレタリアートの〈革命の現実性〉を洞察し、この現実の二重性を分化させ展開させるという仕方ではじめて、理論と現実との結合は可能となるのであり、したがって〈革命の現実性〉の洞察は、革命理論の実現にかかわる重要な問題であったからである。

ローザ・ルクセンブルクは、以上にみてきたSPD理論界の二重の危険性を、マルクス主義理論主体そのものの危機として、したがってみずからの危機として、自覚し、かつ、〈革命の現実性〉の立場からこれを批判的に克服しようとしたのである。しかも、この危機は、次のような根柢的な問いにまで深化されることなくしては、克服されえない性格のものであった。すなわち、マルクス主義理論を方法的に再建し、内面から強化するためには、どうすればよいのか、ということ、換言すれば、マルクス主義〈理論〉はいかにして可能か、という問いが、それであった。彼女は、ベルンシュタイン修正主義を方法的に批判することを通して、この課題に応えようとするのだが<sup>9)</sup>、このことは、カウッ

7) P. Frölich, *Rosa Luxemburg—Gedanke und Tat*, Hamburg, 1949, S. 95.

8) この点についてはマルクスの『ヘーゲル法哲学批判序説』(1843年)のなかの有名な次の命題を熟考されたい。「思想が現実とせまるだけでは十分ではない。現実がみずから思想へせまらなければならない。」



キーに代表される理論傾向が、問題のありかになまったく無自覚であったのに反し、ベルンシュタインと修正主義者たちは、明確に問題の所在をつきとめ、その現実感覚をたよりにして、マルクス主義の方法そのものをも、あからさまにも、修正の組上にのぼせていたという事情を考えるなら、容易に理解されるであろう。わたしは、次に節を変えて、ローザのベルンシュタインにたいする方法論上の批判を見るであろう。

### Ⅲ 総体性範疇の優位

ベルンシュタインは、みずからをマルクス主義方法論への疑問にまで徹底させるのだが、その際のモチーフを折衷的精神であるとして、次のように語っている、すなわち、「抑も折衷説なるものは、多くの場合単に、万事を一事より演繹し、又万事をまったく同一の方法によって取扱おうとする一徹な理論に対して、自然に生まれた反動たるにすぎないものである。そしてこのような一徹さが甚しくなるや、折衷的精神は常に本源の力を以て活路を開くであろう。そしてこの折衷的精神こそ、各教義に内在するところの、思想を『スペイン式の長靴の中に締め入れ』（一定の型に入れる意味——訳者）んとする傾向に対する、真面目なる反逆でなければならぬ」<sup>10)</sup>と。

彼はこうした折衷的精神を発条にして、自然必然性に対しては、科学的蓋然性を対置し、経済の一事をもってすべてを説明し進化を根拠づけようとする傾

- 9) L. Basso, "Rosa Luxemburg: The Dialectical Method", *International Socialist Journal*, No. 16-17. この論文のなかで、Basso は G. Lukács のローザ評価を継承しつつ、次のように述べている。「ベルンシュタインにたいするローザの解答は、今日でもなお、マルクス主義方法論の模範であり、同時期に書かれたカウツキー、ブレハーノフ、メーリングなどのベルンシュタイン批判に明確に優位していた」(p. 504)と。またベルンシュタインその人も論敵ローザを高く評価して次のように述べている。「それは実に私に反対するために書かれた論文のなかで、方法に関しては最も優れたものであった」と。E. Bernstein, *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*, 1906, S. 178 (松下訳『マルキシズムの改造』278頁)。
- 10) E. Bernstein, *ibid.*, S. 9, 邦訳前掲書, 46頁。なお清水幾太郎氏は、『現代思想』(1966年)のなかで、ベルンシュタインの折衷的精神を、「なぜ折衷主義が悪いのか」と聞き直ることによって、全面的に擁護している(73頁)。氏は科学の不偏不党性を主張する際も、歴史的必然性を否定する際も、ベルンシュタインを無条件で支持するのだが、惜しむらくは、『諸前提』から半世紀以上経った今日のマルクス主義の理論水準において、『諸前提』の批判の対象は実はマルクス主義の俗流的形態であったことに、氏が全然気付いていないことである。奇抜な問題感覚だけで思想を語ることはできないことを、氏は銘記すべきであろう。

向に対しては、人間精神の倫理的要素を対置し、更に、矛盾論理から一切を演繹しようとする傾向に対しては、多数の諸影響の共働作用を対置して「唯物論の拡張解釈」<sup>11)</sup>を主張し、そして最後に、こうしたあしき傾向の一切の根源を、「マルクス学説のなかの反逆者であり、又事物の一切の合理的観察を妨げる係蹄である」<sup>12)</sup>ヘーゲル弁証法に求め、これとの「無条件の絶縁」<sup>13)</sup>を主張したのである。彼にとっては、マルクスの弁証法は、ヘーゲル主義の神秘的残滓にすぎず、マルクス・エンゲルスの業績はヘーゲル弁証法のゆえにではなくて、それにもかかわらず成し遂げられたものだったのである<sup>14)</sup>。したがってベルンシュタインの問題としたことの核心は、諸悪の方法論的根源としてのヘーゲル＝マルクス弁証法と訣別することによって、一方では、多面的なひとつひとつの諸事実をそれ自体として大切にする立場を回復すること、つまり彼の言葉でいえば、科学を科学として純化することであり、また他方では、この科学の純化によって、人間精神の自由なる倫理的要素を解放することにあつたのである。

要するに、ヘーゲル＝マルクス弁証法にたいする反逆としての折衷の立場から、科学は科学として、倫理は倫理として、現実現実として、載然と分かつこと、これが、ベルンシュタインの方法論上の主張であつたのだ。しかし、これは、ローザにとつては、マルクス主義の理論的破産を物語るものであり、したがってまた、プロレタリアートの理論的内部崩壊の表白にほかならなかつた。なぜなら、ひとつひとつの事実から成るといふかぎりでのブルジョア社会のあるがままの現実のために、全体としての、とりわけローザにとつては〈有機的全体性～総体性〉としての現実が、したがってプロレタリアートの現実が、放棄されるなら、プロレタリアートにとって、理論の生息する余地はないからである。かくして、彼女は、マルクス主義弁証法の防衛という課題を、とりわ

11) E. Bernstein, *ibid.*, S. 12, 邦訳前掲書, 49頁。

12) *Ibid.*, S. 26, 邦訳前掲書, 69頁。

13) *Ibid.*, S. 26, 邦訳前掲書, 69頁。

14) *Ibid.*, S. 36, 邦訳前掲書, 82頁。

け〈有機的全体性～総体性〉という方法的立場から果たそうとするのである。彼女はいう、「ベルンシュタインの理論は、論究の対象である経済生活の諸現象を資本主義発展の全体と有機的に結びつけて、経済機構の全体との関連のうえで、理解しようとしな。彼は、経済生活の諸現象を、動かなくなった機械の断片的な部分のように、全体の関連から切り離して、それ自体として理解する」<sup>15)</sup>と。

たとえば、資本主義の適応能力について、ベルンシュタインは、信用やカルテルをあげるのだが、その際彼は、信用やカルテルが資本主義の生産と交換の過程に対して、あたかもその〈外部から〉有効にはたらきかけ、成功的な調整を行ないうるかのように説く。もともと彼の問題のたて方は、それらは適応手段であるのかそれとも破壊装置であるのか、といった仕方ではなされている以上、資本主義の経済過程の全体が孕む内的矛盾に深く関わり、その機構と発展との有機的全体性のなかに個々の経済現象を、したがって信用やカルテルを位置づけようとする視角が、つまり有機的に結合しあっている内的矛盾の包括性とその展開の全体性を解き明かそうとする視角が、彼の議論から欠落してゆくのも、当然だったのであり、ローザは、まずもって、こうした方法論上の難点を批判したのである。

またベルンシュタインは、こうした適応手段の有効性の証左として、恐慌の一時的停滞や中間層の存続をあげ、これをもって、マルクスの資本主義経済分析が現代資本主義の把握に際して通用しえなくなった、とするのである。しかし、このような彼の指摘のうち、前者つまり恐慌の問題については、彼女は、きわめて特徴的な次のような恐慌理解を対置するのであった。すなわち、外的要因ぬきの本来の資本主義的周期性恐慌・世界市場の完成とゆきづまりの段階に至って爆発する〈本物の〉恐慌・つまりマルクスのいう恐慌は、これからであり、現在こそ、まさに資本主義の〈終わりの始まり〉が切迫しつつある段階なのだ、

15) R. Luxemburg, Sozialreform oder Revolution, 1899, in *Gesammelte Werke*, Bd. 3, S. 65, 『ローザ・ルクセンブルク選集第1巻』(以下『R選集』)195頁。

という認識が、それであった<sup>16)</sup>。このような恐慌認識に現われた資本主義の段階把握——本物の資本主義はこれからだ、という段階把握は、ベルンシュタインのマルクス主義改竄の試みに抗して、彼女のマルクス主義を生動的なものにした要因でもあったのである。そして彼の指摘の後者つまり中間層の存続の把握の仕方が、ローザにとっては、マルクス主義の方法の基本に関わる弁証法的な把握の仕方が、彼からまったく欠落していることを示しているにすぎなかった。なぜなら、マルクスの方法からすれば、資本制生産の発展とその内的矛盾の展開は、みずからの法則を、その変容を通して、あるいはその否定を通してすら、実現してゆくはずのものであって、ローザの苦心の反論は、実は、この観点を継承しようとするものだったのである。

だが、彼女は、修正主義の理論が矛盾の存在を認めていないとか、あるいはそれを前提していないとか、といってベルンシュタインを論難しているわけではない。修正主義といえども、マルクスと同様に、矛盾の存在を前提している。しかし、修正主義の修正主義たる所以は、「修正主義の理論が、矛盾自体の必然的な発展によって矛盾を〈止揚〉することを基本としていない」<sup>17)</sup> という、まさにこの点にあるのである。そして、このようにベルンシュタインが切り落としていった方法論上の観点こそ、実は、ローザがマルクス主義の方法の核心として継承しようとしたもののなのである。

それにしても、矛盾の矛盾自体による止揚の方向を、したがって弁証法を拒絶したベルンシュタインは、〈方法論的に〉どうしようというのであろうか。これを特徴づけて、ローザは、次のように述べている、すなわち、「弁証法にたいしてもっとも研ぎ澄ました矢を向けることによって、彼のやっていることはといえば、たちあがりつつある階級意識をもったプロレタリアートの独自の思考方法に対して闘いを挑んでいること以外のなんだというのだ。……ベルン

16) *Ibid.*, SS. 46-49, 『R選集』169-172頁。この恐慌論の部分は第2版(1908年)で書きかえられている。それは、ローザの経済学研究が再開される時期でもある。この点については、機会を改めて論じるであろう。

17) *Ibid.*, S. 64, 『R選集』194頁。

シュタインは弁証法に別れを告げ、一方では＝他方では、だが＝しかし、にもかかわらず＝それでもなお、多かれ＝少なかれ、などという思想の動揺をとり入れることによって、没落しつつあるブルジョアジーの歴史的に制約された思考様式に」<sup>18)</sup>、それも「個々の資本家の思考方法」<sup>19)</sup>に、完全に落ち込んでしまっているのだ、と。

更に、同じことだが分けていうなら、矛盾の矛盾自体による止揚の方向を拒絶したベルンシュタインの方法から帰結される修正主義の〈理論的内実〉を、ローザは、どのようなものとして特徴づけているだろうか。矛盾の矛盾自体による止揚の方向を断念するということが、これが、ここでも問われなければならない。それは、資本主義の矛盾が完全に成熟し、革命的な止揚を不可避にするまでに鋭角化することを展望するのではなくて、そうではなくて、反対に、この矛盾が鈍化し緩和することを展望することであり、したがってそれは、その物質的前提としての資本主義生産の発展そのものを否定することになるのである。とすれば、ベルンシュタインは、資本主義の発展、その巨大なる生産力の実感から出発しておきながら、その帰結である生産力と生産関係の矛盾を否定することによって、論理的には、〈資本主義発展の停滞〉を前提していることになるのであった。これは明らかに論理矛盾である。ローザは、ベルンシュタインのこの論理的自家撞着を指摘して、マルクスではなくて、ほかならぬ当のベルンシュタインの理論に、〈空想性〉の刻印を返上するのである<sup>20)</sup>。

逆に、ローザにとっては、疑いもなく、「矛盾は緩和せず尖鋭化するにちがいない」のであった。そしてここでいう「ちがいない」<sup>21)</sup>とは、矛盾が緩和され変容を受けるような部分的局面を一方では認めながらも、それにもかかわらず矛盾は尖鋭化するに「ちがいない」ということであって、このように彼女が認識しえたのは、1つには、関税政策と軍国主義というかたちで現われてい

18) *Ibid.*, S. 95, 『R選集』238頁。

19) *Ibid.* S. 67, 『R選集』197頁。

20) *Ibid.*, S. 65, 『R選集』194頁。

21) *Ibid.*, S. 65, 『R選集』194頁。

る資本の世界政策とそれに対決する労働運動という位相で、ドイツの現実を二重化して把える歴史認識があったからであり、また2つには、「小ブルジョアの改良主義者は、世界のすべての事態の〈よい〉面と〈わるい〉面とをみてゆき、さまざまな花壇からすこしずつ花を摘みとってくるようなことをする」<sup>22)</sup>が、より基本的には、この〈わるい〉面こそが、資本主義の本質に関わる〈面〉なのだ、という理論認識があったからである。

以上の展開のなかでわたしは、ベルンシュタイン修正主義にたいするローザの方法論的批判を総括して、そのなかから、ローザその人のポジティブな方法論の提起をとり出さなければなるまい。すなわち、こうである。

(1) 抽象的な分離・人為的な孤立化・機械論的な区別・そしてこうしたことのすべてによって得られた諸事実＝諸側面の外面的折衷、ではなくて、諸相互関係を含んだ有機的な全体の流れ・不断の転形過程にあるものとして有機的にダイナミックに動く歴史過程の総体、これを認識する立場から、歴史としての現在を分析すること<sup>23)</sup>、(2) あるいは同じことだが、資本主義社会の歴史的現実を、全体として、運動として、有機的に把握する〈総体認識の弁証法〉を方法論上の武器とし、そしてこの武器によって、資本制生産の矛盾の根柢に深く内在し、この矛盾を矛盾それ自体の必然的な発展によって止揚する論理を、——彼女の好んで用いる表現でいえば、物ごとそれ自身の論理を、折出すること、(3) 更に、このように、〈認識の弁証法〉は、矛盾それ自体による矛盾の止揚を、したがってプロレタリアートの行動による止揚の論理を明らかにし、かつ、推し進めるのだから、それは、そのまま、広汎な労働者大衆の自覚的な意志と行動による未来の建設の方法でもあり、したがって、〈行動の弁証法〉でもあらねばならないということ<sup>24)</sup>、(4) そして最後に、——これは本稿の論考の範囲ではないが——行動の弁証法は、認識の弁証法が諸部分にた

22) *Ibid.*, S. 85, 『R選集』223頁。

23) この点は多くの論者が一致して高く評価するところである。G. Lukács, „Rosa Luxemburg als Marxist“, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Berlin, 1923, SS. 39-56; P. Fröhlich, *Einleitung des R. Luxemburgs Gesammelte Werke*, Bd. 3, S. 3; L. Basso, *op. cit.*, pp. 506-507.

24) L. Basso, *ibid.*, p. 505, p. 520, etc.

いする〈有機的全体性～総体性の優位〉を特徴としたのと同様に、部分としての日常諸改良闘争の究極目標による有機的統一過程としてなければならないということ<sup>25)</sup>、——以上が、彼女の方法論で主張された点であった。

このように、ローザの総体性の弁証法に特徴的なのは、〈認識の弁証法〉がそのまま〈行動の弁証法〉であるというかたちで、つねに、認識が優位する点にあるのではなかろうか<sup>26)</sup>。彼女は、認識と行動とを、理論と実践とを、しっかりと結合しようとするのだが、それは、いつも、認識による行動の結合に、理論による実践の統一に、なってしまうていはいまいか。それは、ローザの弁証法が、理論＝認識の優位による、いわば、片面的な弁証法であることを、物語ってはいまいか<sup>27)</sup>。そして更につきつめていえば、彼女の〈総体性〉は、すぐれて認識レベルにおける、意識形態としての総体性にとどまっているのではなかろうか。現実の力、あるいは力量としての、あるいは現実の関係としての、総体性という性格が、〈弱い〉のではなかろうか。われわれは、こうした疑問に、いま一度立ち返るであろう。

#### IV 歴史的必然性範疇の構造

すでに何度となく指摘してきたように、ローザは、物ごとそれ自体の内的矛盾の展開とそれの矛盾そのものによる止揚の過程を、力説する。しかしそれにしても、これをわがものとする〈総体認識〉の方法論的立場が、彼女にとって上述のような決定的な重要性をもっていたのは、またなにゆえであったのか。この点について彼女は次のように述べている、すなわち、「プロレタリアートの階級闘争が発展してゆくなかで獲得された最大の成果は、社会主義実現のた

25) 拙稿、前掲「思想」論文を参照されたい。

26) 客観認識を大切にすることから、客観主義者であり、したがって没主体的だ、とする単純な批判は、批判にならない。概して客観主義とか主観主義とかは、それが使われる論理レベルを明らかにする努力を怠るなら、なにも言わないにひとしい。こうした単純な評価から無縁な示唆的な論文として、次の2つを参照されたい。藤本進治「客観主義について」(『マルクス主義と現代』所収)、竹内芳郎「弁証法の復権」(『展望』第99号所収)。

27) ネットルは彼の『ローザ伝』のなかで、理論が先行的に実践を規定していること、実践には独自の意義が認められていないこと、を指摘している。P. Nettl, *op. cit.*, p. 211.

めの端緒が資本主義社会の〈経済的諸関係〉のうちにみいだされたことである。これによって社会主義は、1千年このかた人類の念頭にうかんでいたひとつの〈理想〉から〈歴史的必然〉へと転化した<sup>28)</sup>のである、と。つまり彼女にとって、〈客観的物質過程の内的矛盾の展開とそれを把握する総体認識〉という方法論的立場が、決定的な重要性をもっていたのは、この観点こそが、実は、社会主義が人々の観念に宿る理想や願望であることをやめて、それによって自己を、〈科学〉として、〈歴史の必然〉として、主張することのできる〈方法論上の拠点〉だったからである。

しかしここで、科学といい、歴史の必然といっても、そのままでは、決して明らかではない。それは、従来のローザ研究でしばしば指摘されてきたように、客観主義的な、決定論的な、あるいは宿命論的な、内容をもつものであろうか。従来の批判とは、客観的な歴史過程にたいする主体的な介入のモメントを過小に評価する傾向を、ローザのなかにみて、その没主体性を論難するという類のものである<sup>29)</sup>。そしてこうした論難にたいしては、ローザが〈初めに行動ありき〉というファウストの言葉をモットーにし、好んで繰り返しもしたという事実が、しばしば対置されてきた<sup>30)</sup>。しかし、これでは一向に問題は解決しない。それだけではない。こうした反批判だけでは、彼女の態度において一見相矛盾するかに見えるこの2つの相は、むしろ、そのまま固定されてしまうことにもなるだろう。わたしは、こうした同次元的な相反する評価に決着をつけて、事柄の核心へと迫るために、次のように問題を問い直してみたいと思う。すなわち、彼女が一方では客観に固執しながらも、他方ではきわめて主体的かつ行動的であったことのなかには、またそのように思想し行動することが彼女にとって可能でもあり必然でもあったという、このことのなかには、一体

28) R. Luxemburg, a. a. O., S. 68, 『R選集』199頁。

29) F. Oelßner, Rosa Luxemburg. Eine kritische, biographische Skizze, Berlin, 1952, 杉山訳「ローザ・ルクセンブルク」182-183頁。なお本注26を参照されたい。

30) ローザをより内面的に理解しようとする論者、P. Fröhlich, P. Netti, L. Bassoなどは、大なり小なり、こうした傾向をもっている。わたしも、前掲「経済論叢」論文ではこの点を十分に明らかにしていない。



どのような内的連関がひそんでいるであろうか、と。

問題の鍵は、次の一節に萌芽的にひそめられていると思われる。すなわち、「ベルンシュタインは〈マルクスの壮大な著作の全体を貫く二元論〉にぐちをこぼしている。だが、マルクスの〈二元論〉は、社会主義の未来と資本主義の現在、資本と労働、ブルジョアジーとプロレタリアート、という二元論にほかならない。それは、ブルジョア社会のなかに存在する二元論の、すなわちブルジョア社会の階級対立の、みごとに科学的反映なのだ」<sup>31)</sup>。このようなローザの主張から窺い知られるように、彼女は、社会主義プロレタリアートの勝利を〈ただちに〉歴史的必然として考えているわけでは決してない。われわれは、だから、この、歴史的必然としての社会主義プロレタリアートの勝利、ということのなかに含められている内的論理連関を解きほぐさなければならないのである。

すでにふれたように、社会主義は、物的な諸関係の分析によって、はじめて歴史的に必然的な発展法則となることができた。だが、この諸関係の総体は、上述の引用にみたように、ローザにあっては、資本の作用と労働の反作用との、ブルジョアジーの作用とプロレタリアートの反作用との、相互関係としてあり、したがって、それは人間主体の介入によって動いているものなのである。だとすれば、歴史的に必然的な発展法則といっても、この限りでは、いまだ傾向としてあるにすぎず、客観的な可能性としてあるにすぎないのである。資本の世界政策と労働者の社会主義運動とは、いずれも同様に、客観的可能性であり、歴史の傾向であり、またそのかぎりでの歴史の必然であったのである<sup>32)</sup>。

しかし、ローザにあって、総体認識の成果は、このような客観的可能性を示すだけのものではなかった。理論は、理論〈一般〉でもなければ、〈純粹〉理論でもなかった。理論は階級性をその重要な属性とせねばならなかった。そして理論の階級性とは、ローザの場合、資本の作用と労働の反作用との総体を、

31) R. Luxemburg, *a. a. O.*, SS. 74-75, 『R選集』209頁。強調は筆者。

32) *Ibid.*, S. 82, 『R選集』220頁。

どのように動かすのか、ということ、この階級の二元的矛盾にどう関わるのか、ということであった。矛盾を自然成長的な枠のなかにおしとどめて、それを鎮め妥協させるのか、それとも、この矛盾を激成し矛盾それ自体の力でこの枠を超えさせ、かくして矛盾を止揚するのか、ということであった。プロレタリアートは、いうまでもなく、矛盾を矛盾自体の力で止揚するという、後者の立場に立つ。そして理論認識におけるこのような階級性に媒介されてはじめて、たんに客観的可能性にすぎなかった社会主義は、いまや、〈どうあってもそうあらざるをえない・そうあるほかない〉必然性に、いわば〈客観的な不可避的必然性〉とでもいうべきものに転化する。しかもこの〈客観的な不可避的必然性〉は、すでに述べたように、純粋に客観的な必然性ではなくて、——物的・対象的なかたちで、ではあるが——人間の主体的実践を含み込んだ必然性であることによって、そのまま、主体のうちに内在する必然性となるのである。すなわちそれは、上述の、〈客観的にどうあってもそうあらざるをえない・そうあるほかはないところの・不可避的な歴史の必然性〉を前提にしながらも、この必然性に支えられて、歴史的主体たるプロレタリアートが、行動的かつ意識的に、この必然性のなかに入介入して、〈どうあってもそうあるべきだ・そうしなければならぬ〉として、はじめて実現しうるような、いわば〈主体的な当為的必然性〉とでもいうべきものなのだ。あるいは、〈主体のうちに内在し主体のうちから内発する必然性〉とでもいった方が、よりの射た表現になるかも知れない。しかもこの自覚的な意志と行動に担われた当為的必然性は、人為的な＝特殊階級的な性格を免れている。なぜなら、当為的必然として主体に内在する必然性はそのまま、先の不可避的必然性としての客観的歴史過程の論理（＝ものごとそれ自体の論理）から連続し、それに直接に規定されているからである。

わたしは以上の展開のなかで、いささか便宜的にも、2つの歴史的必然性があるかのような叙述をしてきた。しかし、歴史的必然性に2つの種類があるわけではない。いずれの歴史的必然性も、すでに示唆したように、社会的事象に

関わる必然性であってみれば、当然のこととして、人間の主体的実践を含んでいる。ただちがうのは、〈客観的な不可避的必然性〉の場合は、それを物的・対象的な仕方を含んでいるのに対し、〈主体的な当為的必然性〉は、それを意識的・行動的な仕方を含んでいるということである。だとすれば、このちがいは、同じ1つの歴史的必然のなかの位相のちがいというか、論理的なレベルのちがいとでもいうべきものなのであろう。いずれにせよ、そこには、〈客観的な不可避的必然性〉が〈主体的な当為的必然性〉を根拠づけ、そして後者が逆に前者を客観的な現実のなかで開示することによって、1つの歴史的必然性として有機的に絡まりあっているという内的連関がみられるのである。そしてこのようにローザの〈歴史的必然性〉が、〈客観的な不可避的必然性〉と〈主体的な当為的必然性〉との同時的内的結合としての1つの〈歴史的必然性〉であったからこそ、それは、彼女にとって、科学としての自己主張の方法的拠点として機能しえたのであり、また当時の静観的解釈主義と無原則的行動主義とに対する両面批判の武器ともなりえたのであった。更にわれわれが彼女の歴史的必然性をこのようなものとして理解してはじめて、客観主義的宿命論者＝ローザ・ルクセンブルクといった従来の公式の批判およびそれに対する〈初めに行動ありき〉的な反批判とは、いずれも、きわめて一面的かつ外面的なものとして退けられねばならないことが、納得されるというものである。

否、そればかりではない。彼女の歴史的必然性の概念がこのような内実を孕んでいるからこそ、ローザ＝マルクス主義の核心をなす方法は、やはり、客観的に不可避的な歴史の必然性を〈認識する弁証法〉であると同時に、そのまま、主体的な当為的必然性を〈行動する弁証法〉でもあったのである。そしてここでも、Ⅲの最後で指摘したのと同様に、〈客観的な不可避的必然性〉を〈認識する弁証法〉の優位が、彼女の歴史的必然性範疇の内的構造から、その特質として明らかになるのである。

## V ローザ＝マルクス主義方法論の問題性

わたしは、以上の展開を踏まえ、とくにⅢ・Ⅳの帰結部分で示唆したところにしたがってローザ＝マルクス主義方法論の問題性を採り、これをもって結論にかえたいと思う。

すでに何度となく指摘してきたように、彼女は、しばしば、ものごとそれ自体の論理といういい方をし、ユートピア的な主観主義的傾向を批判する。それは、歴史の過程が人間の人為的な創造物ではなくて、人間に起因するものではあるがそれ自体のうちに固有の力をもっていて、いったん動き出すと、その論理に従って、それ自身の勢いで動くものだ、という確信に支えられていたからである。だが他方、そうかと思うと、客観的な歴史の過程は、——それがいかに客観的であるといっても、やはり——つねに人間の自覚的な意志と行動によってつくられているのだということを、彼女は強く力説して、不偏不党を装う科学主義的な客観主義的傾向を批判する。そして彼女がこのような相反する主張を交互に繰り返したことの背景には、次のような方法論的モチーフがひそめられていたのである。すなわち彼女は、ユートピアと科学との、あるいは主観主義と客観主義とのいずれかに、一面化しようとする傾向をともにのりこえ、両者の対立の止揚のうえに、マルクス主義理論の可能性を展望しようとしていたのである。

かくして彼女は、自覚的な意志という主体の原理と認識の客観性とを、同時に実現しようとして、両者を究極にまで尖鋭化させはしたが、しかし、むしろ両者は——表面的には別個に現われながら——構造としては未分化のままで、対立にもたらされることもなく、逆に直接的同時的に同一性のもとに絡まりあっていたのではあるまいか。そして、この両者の直接的同時的同一性のゆえに、彼女の〈総体性〉範疇は、自己を十全かつ流動的に開示することができず、いわば単色の直線的な普遍性として〈直観〉され<sup>33)</sup>、どこか有機体論的な全体のなかにおさまってしまう<sup>34)</sup>ことになってはいないか。また彼女は、〈総体性〉

範疇を理論的な基軸にして、弁証法の防衛と復権を唱えたのだが、この〈総体的性〉範疇のこうした直観的直接性・単色の普遍性・有機体論的傾向のゆえに、みずから掲げた弁証法復権の課題に十分には応え切れなかったのではあるまいか。更にいえば、彼女における認識と行動の弁証法は、認識優位のもとでの認識—行動の弁証法というかたちをとり、したがって認識と行動との相互作用は、たんに理論がみずからの理論的妥当性・正当性を、直接に現実の行動によって検証するということに終わる〈甘さ〉を含んでいたのではなからうか。そしてこうしたことの原因のすべてではないにしても重要なその1つは、認識と行動との同一性の成立根拠が、そしてこの同一性を保証する主体的条件が、彼女の場合、自明のものとして問われることがなかった、という事情に基づいているのではなからうか。すなわち、彼女にとって、プロレタリア存在は、現実の社会を担い階級を形成している物的な力量としての、現実の関係としての、主体であるよりはむしろ、あるときは意識として、またあるときは端的に物的なものとして、現われるのであって、まさにこのようなプロレタリア存在の理解の仕方が、もっとも根柢的なところで、〈総体認識の弁証法〉における問題性をかたちづくとともに、——本稿の論及しうる範囲ではないが——〈行動の弁証法〉における過程論的断念と組織論的視角の欠落を帰結させているのではなからうか<sup>33)</sup>。

以上、疑問のかたちで提起してきたように、ローザのマルクス主義方法論は、甘さなり弱さなりを含みつつも、やはりマルクスその人の方法に迫るものとして、問題性を抱えている。それは、SPDのありかた、とりわけカウツキーと

33) ネットルはローザの階級意識論についてではあるが、それを、「けっして石が投げ込まれないガラス張りの家」であるとか、あるいは「そこから出発するすべての汽車が同じ方向に向っているような、最上の19世紀鉄道の、広大にしてインターナショナルなどひとつの待合室」であるとか、と評している。特殊性を媒介しない単色の普遍性への傾倒をみている、といえようか。P. Nettl, *op. cit.*, p. 240.

34) ローザの有機体論的傾向を自然発生性範疇との関係で批判した同時代人は、なんといってもレーニンであるが、その後、ルカーチも、自分のなかのルクセンブルクを止揚しレーニンと思想的に対決するなかで、批判的に検討している。G. Lukács, „Kritische Bemerkungen über Rosa Luxemburgs ‚Kritik der russischen Revolution‘“, *a. a. O.*, SS. 276–297, 平井俊彦訳『ローザとマルクス主義』174–211頁

35) 拙稿、前掲「思想」論文を参照されたい。

ベルンシュタインに代表される理論傾向に規定されながら、その後のローザの重要な問題領域の1つになってゆくのである。が、ここでは、〈ドイツのローザ〉をその端緒において把えた方法論的問題性を考察するにとどめ、その後のローザの方法論的展開は、機会を改めて論じるであろう。